

# 北から南から

## 清水赤十字病院検査部

浦 準 一

北海道の中心部の広大な十勝平野の日高山脈側に位置し、名の如く、清らかな水が流れ「第九の響く町」として有名な清水町にあります。

清水町の人口は、1万2千人ですが、乳牛は1万8千頭も居る酪農地帯です。帯広市より車で45分、札幌市からは日勝峠を通り、旭川市からは日本八景の一つである狩勝峠を通り約3時間で清水町です。

清水町は、昭和55年に、全国では初めて町村でのベートーベンの「第九」の合唱をし一躍「第九の町」として有名になり、文化の郷として文化活動に力を入れている町です。

終戦直後の、昭和21年に、日本赤十字社北海道支部清水診療所として開所され、開所当初は内科1科病床数2床、職員14名のスタートでした。その後、昭和26年に外科・産婦人科を新設し、病床数22床となり清水赤十字病院と改称され、昭和40年の改築時には病床数が現在の92床となりました。

平成元年に鉄筋コンクリート造、地下1階地上3階小児科を新設した病院が完成、建物内部は光庭を3か所トップライト等で外光をふんだんに取り入れ、2階・3階の病室からははからくり時計のカリオンが「第九」を奏でる公園が一望できる、近代的な病院に生まれ変わりました。

又、病院の回りは役場庁舎、文化センター町立図書館など、公共施設が集約されたされ静かで自然に恵まれた環境に位置し、1時間

以内で行けるスキー場が5ヶ所、ゴルフ場が9ヶ所あります。

近くにお越しの節は、どうぞ気軽にお立ち寄り下さい。

現在、医師5名、看護婦41名、検査部3名等、職員数98名で、厳しい医療情勢の中、地域住民の皆さまに、より一層愛され、信頼される病院であるために、職員一同、頑張っております。

小人数の検査部は、技師2名、助手1名の3名体制で実施し、平成4年度より病理・細菌は全面外注しておりますが、今年度生化学自動分析機（CL-7300）血球計数装置（MAXM A/L-Rctic）を更新し、検体のバーコードによるオンライン化をはかり、能率アップして、患者サービスに努めています。

今後の課題は、検査部員の増員による緊急検査の対応と、新規項目（生理部門を含む）の研修も重ねて行き、検査部門の存在価値を高めると共に、努力して行かなければならないと思っています。





# 北から南から

## 釧路赤十字病院

佐々木 充孝

北海道釧路市は、道東に位置する20万都市である。

その昔、釧路はクスリ、コタンと称するアイヌ部落であった。いつ頃から和人が開発にあたったかは詳細には解らないが、明治になると、全道に地名を改めることが起こり、明治2年蝦夷を北海道、クスリを釧路と改めたのである。

(北海道蝦夷語地名解)から

釧路の経済を支える紙パルプ、石炭、水産の三本柱のうち一本である水産経済にとっては、最も重要な場所で、東北、北海道を通して最大の規模と水揚げを誇っており、釧路名物の一つでもある。

当院は昭和20年12月、74床37名の職員を以て発足し、昭和40年には高等看護学校が新設され看護婦養成にも着手しております。

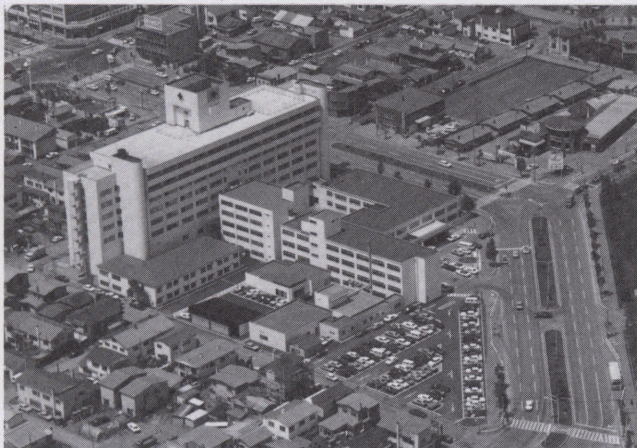
現在は病床数536床16診療科を擁する釧路地方2市12町村の基幹病院として地域医療の一端を担っている。特に小児科では医師6名

を配し、心臓、アレルギー、染色体異常等特殊外来診療を実施するとともに、道東地域の未熟児センター的役割を果たしております。

検査部門は、医師(病理検査部長)1名、技師18名、助手3名をもって構成し、生化学、一般、血液、生理、病理(電顕)、R I、微生物、血清等の検査を実施し、技術の研鑽と業務に当たっております。

検査室の1ヵ月平均検査件数は134630件(平成5年)で、一部のシステム化(生化学)を実施しておりますが、将来トータルシステムを考えており、院内における中核として十分な威力を発揮出来る様、進行中である。又当院は第二次緊急指定病院、緊急告示病院となっており、休日等のポケットベルによるオンコール体制から一当直制を平成6年9月より実施し(夜間はポケベル)対応に当たっております。

これからも「より正確に、より迅速に」をモットーに、地域医療の充実とサービスに寄与し、更に職員の親睦等、活発に行い士気の高揚にも務めてまいりたいと思います。





---

# 北から南から

---

## 富山赤十字病院

鶴山稔

富山赤十字病院は、富山湾に面し、富山県の中心に位置する県都富山市にあります。

古くは越中と呼ばれ、「富山の薬屋さん」で全国から親しまれてきました。

「富山名物、かずかずあれど、海には蜃気楼、ほたるいか、山は立山、剣岳、歌はおわらに麦屋節」といわれるように、「蜃気楼」は4・5月頃に海面に光の屈折によって生じる幻影は全国で唯一のものであり、「ほたるいか」の神秘的な光を出して遊泳する姿も他に見られない情景であります。

3000Mの立山連峰は、海岸線からも眺められ、降雪量の多いことが、水源となり田畑を

うるおし、山麓から湧き出る水は、霊水、名水といわれている。哀調を帯びた「おわら節」に勇壮な「麦屋節」に「こきりこ節」は、富山の歴史と風土で培われた民謡であります。

「いい人、いい味、いきいき富山」のキャッチフレーズのように、人は親切であり、魚や食物はおいしく、自然に恵まれた富山であります。

病院は明治40年創立以来今年で87年を迎えています。この間には幾多の変遷をへて良き先人の方々が築いて下さった結果、現在では外来患者さん1日約1,000余人、ベット数535床、職員520余名となりました。

良い医療を患者さん方に提供出来るように院長を筆頭に、全職員が一丸となって日々努







早春の立山連峰（H. 5. 2月下旬）

力しているところで、その成果が上がり病院経営に明るい光が差しこんできつつあります。

平成8年5月完成を目指す、新病院建設中で（着工平成6年5月1日）、敷地は神通川

に隣接し面積は33,000㎡、建物は9階建となり東側には立山連峰が眺望出来、西側には射水平野と富山湾が、南側には富山県を囲むかのようにスキー場が数々あり、特にナイトスキーを病室から眺めることも出来、北側には奥深い湾の端、黒部川河口附近が望めます。

副院長を検査部長とし、部員21名で地域医療に取り組んで疾病の早期発見と各種健診業務等に積極的に係わり、医療集団の一翼をになって部員としてなすべきことに全職員共々努力しているところであります。

会員の皆様と我々の技師会を益々有益な会に育てて行き、各位のご研鑽を念じつつ今後は更らに海外医療協力に目を向けて頂けることを願っています。



# 北から南から

## 水戸赤十字病院

太田 明

水戸市には日本三大名園の一つ偕楽園があり、毎年2月「梅まつり」が催され梅林に漂う梅香に誘われ多くの観光客で賑います。また、東へ三里ほど行くと大平洋の荒波が打ち寄せる大洗海岸があり、自然に恵まれた水戸市は茨城県の政治、経済の中心地ともなっております。

水戸赤十字病院は大正12年6月に茨城支部病院として創立され、水戸市を中心とした県中央地区の基幹病院として地域住民の高度医療に貢献することを目標に活躍しております。

当院は平成6年4月に新棟の増改築を行ない、病床数388床、水戸地区隔離病棟70床、各科診療科、人工透析、人間ドック、各種検診事業、特殊疾患外来等の診療体制で1日約1000名の外来患者に職員430名で対応しております。

検査課も4月に新棟2階に移転し、気分も

新たに検査業務に励んでおります。検査課の構成は、生化学検査係4名、血液一般検査係5名、病理検査係2名、微生物血清係4名、生理検査係2名の1課5係で臨床検査技師18名、事務業務1名、洗浄業務1名、計20名の人数で月平均14万件の検査件数を行っております。時間外緊急検査は輸血検査、血液検査、(E-3000)、生化学検査(22項目 日立7070型)をポケットベルによるオンコール24時間体制により、各診療科の要望に応じております。

厳しい医療環境の中の検査部門ですが採血問題、生理検査の充実など、検査業務を積極的に拡張し病院内での検査部門の必要性をアピールしていきたいと思っております。

今後は、検査業務量やランニングコスト、迅速検査等を考えコンピュータ化を計り検査受付から検査結果報告まで自動システム化で患者サービスに努めていきたいと思っております。





---

# 北から南から

---

## 盛岡赤十字病院

上 中 雅 文

「患者指向」を最大のコンセプトとして、盛岡市の中心から南へ8キロ（旧都南村）の現在の位置に移転したのが1987年。

東側を北上川がゆったりと流れ、この川そのものが病院の一部の風景として存在しているかに見えるほど、大自然のなかにとけ込んでいる。

北側に広がる日本庭園・建物を一周する散策道は、患者さんにとっても職員にとってもホッとできる空間である。

病院をとり囲む樹木は全てが四季を感じさせ、春にはカルガモが3家族も出産・子育てのために中庭を暫し占領する。

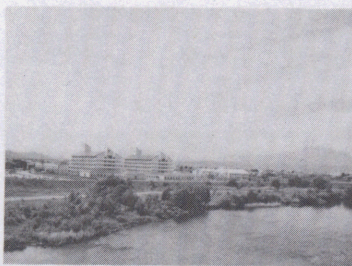
すべてが「患者指向性」の結果であり、プロセスなのである……………。

そんなペンション風の建物の2階中央部に我が検査室は、岩手山・雫石スキー場を望む一角を占めている。

「常に患者をまん中にすえたコミュニケーション」……をモットーに、医師2名（検査部長・病理部長）、看護婦2名（採血）、受付1名、そうして31名の技師で構成するスタッフが24時間体制で地域医療を支えんと頑張っている。

そんなおおらかでゆったりとした時間の流れのなかで、いつも患者がまん中にあることを忘れずに謙虚な気持ちで仕事してゆけたら良い……とこんな風に私たちは思います。

雄大な北上川のほとりにたたずむ我が盛岡赤十字病院を紹介しました。





# 北から南から

## 和歌山赤十字病院

三木 央 吉

和歌山県は、かつて紀州と呼ばれていた所です。とくに県の南の方は紀南と呼ばれ豊かな自然と明るい太陽に恵まれた国です。大坂府に隣接する県郡和歌山市は城下町として発達した町で、現在百万県民のうち40万人がここに在住しています。新しくできた関西空港は、和歌山市からは至近距離にあり、1994年9月にこの空港の開港とともに和歌山市は急に世界に近くなった感じがいたします。

わたくしどもの和歌山赤十字病院の誕生は、1905年にさかのぼり、全国の赤十字病院の中でも有数の歴史の古さを誇っています。

当初は内科と外科だけでわずか50床の病院としてスタートしましたが、その後着実に発展を遂げ、現在は遂に844床を有するにいたしました。

さらに1995年6月には写真に示されているような地上14階建ての新病棟が竣工することになっています。現在診療科は23科を数え、

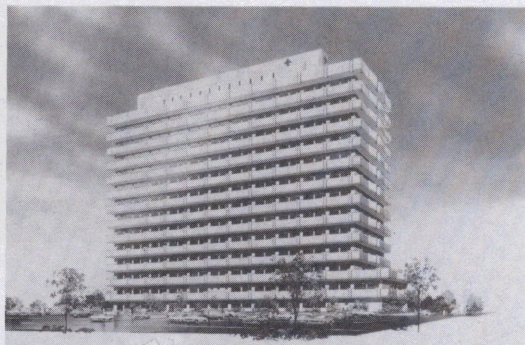


外来患者数は多い日には1400人にも達します。

臨床各科で小規模に行われていた臨床検査をまとめて行うように中央検査部門が設立されたのは今から36年前のことです。

本院の臨床検査部門には検査部と病理部があり、あわせて46名の職員が、働いています。職員は各検査室に配属されて仕事をしていますが、検査技師は救命救急センター内の緊急検査室の当直があるので、どの検査室のスペシャリストになっても、基本的な緊急検査の技術には常に接していただけることになっています。体外受精のための受精卵の培養や凍結保存なども検査技師が担当しています。過去数年間を振り返ってみても、臨床検査技師の仕事の内容はかなり多様化してきています。一方臨床工学士などの誕生で、検査技師の活躍できる場が限定されつつあるようにも感じます。

全国の赤十字の検査技師の皆様の御意見を参考にしながら今後の道を探っていきたく思いますのでよろしくお願い致します。





# 北から南から

## 山口赤十字病院

光 永 弘

山口県のほぼ中央に位置する山口市は室町時代に大内氏とともに発展し、西の京とも云われ、今でも古都の佇まいが残る静かな町の病院です。少し足をのぼせばカルスト大地の秋吉台や秋吉洞、津和野、萩等の観光地も有ります。

当院の前身は明治16年に開設された山口県病院であり明治21年に日本赤十字社山口支部病院として始まり昭和18年に山口赤十字病院と改称されました。昭和55年に改築され古い歴史を物語る面影は無くなり、現在は502床、職員数628名の総合病院です。

検査部の歴史は昭和18年頃より病理研究室として細菌検査や病理組織を行ない、昭和28年には生化学と梅毒反応検査室が出来ました、その当時の職員数は5名でしたが一時は27名となり、その後機械化が進み現在は23名で190項目（白血球分類を含む59項目に至急対応）を検査しております。

検査部の設備として特に紹介するものは有りませんが、前部長の「検査部が病院の中核

になろう」との指導で、電算化も検査部が中心となり、医師、看護婦、医事課等関係部門の人達と何度も会議を持ち、診察券のカード化、ファックスによるネットワーク作り、検査依頼書の一枚化、時系列的に見られる報告書、採血室の検体ラベル発行等が実現しました。看護部との関係もうまくいっており、検査する立場から作った検査案内も依頼する側の意見もきながら作り変えています。最近では検査部とリフトで連結されていない病棟には朝の検体収集に出向き、病棟の業務支援を始めましたが、今までは各病棟よりバラバラに提出されていた検体が、一度に集まる為、検査成績の報告時間も早くなりました。検査業務で覚えたパソコンの知識は、看護部やOP室の情報処理に提供し、看護学院の微生物学や情報科学の講義も4名の検査技師が担当しており看護婦さんの卵の時から関係作りもしております。遊びでも検査部が中心となりスキーバスや登山バスを企画し、他部門とも交流をもち、電話の向こうの顔が分かる仲間を作って少しでも業務が円滑に流れる様に心掛けています。

▶旧病院玄関付近





---

# 北から南から

---

## 山梨赤十字病院

山崎美喜雄

河口湖は東京新宿から中央高速バスで1時間50分で着きます。山梨赤十字病院は河口湖インターを出て約2～3分の所にあり、近くには日本一の富士山があり、四季折々の富士山を眺めることができます。病院の周辺は赤松林に囲まれているほか、秋には松茸も取れますし、冬には松林が樹氷に輝くこともあり、非常に素晴らしい自然環境に恵まれた場所にあります。

山梨赤十字病院の歴史は、昭和12年組合員診療所として設立、昭和16年に日本赤十字社に移管され、岳麓療院（37床）となり、昭和28年に名称変更岳麓赤十字病院（145床）となりました。昭和41年に火災により管理棟と一般病床30床焼失し115床となり、昭和43年鉄骨コンクリート3階建てにし158床となりました。昭和45年に名称変更により山梨赤十字病院となる。平成3年7月に新築移転し、総合病院となり、ベット数222床（一般病床210床、結核病床6床、伝染病床6床）、診療科は17科で1日外来患者数約550名、1日入院患者数平均190名、検査科の1ヶ月稼働件数は約9万件であります。

現在中央検査室は2階にあり、検査室の下

1階に中央採血、採尿室があり、ダンメーターで接続し、検体や緊急検査報告書を上げ下げしており便利であります。検査科のスタッフは部長（院長兼務）、臨床検査技師8名、補助員1名、事務員1名、洗浄員1名、計11名、他、外注駐在員2名で行っています。当院検査科の特徴は病棟採血と検診部門です。病棟採血は昭和49年から始めて約20年になります。早朝午前6時45分から8時まで各病棟を廻り、入院患者の採血を検査技師2名で行っています。1ヶ月平均採血数1000人余りです。病棟採血以外は出血凝固検査の採血を検査室内で行っています。またもう一つの特徴は検診部門です。検診は院内の間ドック、地域の定期検診、そして院外出張検診です。出張検診は、各町村の老人保健法と職場の成人病検診です。院外検診の検査項目は、心電図、超音波、眼底カメラ、尿検査、血液検査（生化学、血液一般、血糖、感染症検査）です。院外検診は地域の公民館や会社の事務室が検診場所になり、そこに各検査機器をセットをし、検査をします。血液検査については、その日に持ち帰り検査報告書を作成します。院外出張検診は、年間受診者約2000人です。検診部門は独立しておらず全部スタッフが兼務しております。スタッフ一同院



内検査だけでなく、地域医療活動や患者さんの立場を考え毎日業務に努力しています。

環境はもとより最新の医療機器を備え、富士北麓地域の中核的基幹病院として活躍しています。河口湖や日赤富士山荘にお越しの節は、是非お立寄り下さい。





# 北から南から

## 鳥取赤十字病院

### 濱 嶋 節 子

朝7時半、早番の技師二人は、電源、水源などをONにして、検体収集にとびだしていく。約10分で帰室し、一人は分析機のキャリブ、一人は血清分離に従事。やがて、病院近くに住む技師、遠距離から車をとばしてやってくる若い技師など、一人ふえ、二人ふえして、担当部門の仕事の準備をはじめ。8時25分二階検査室の中央で行われる朝礼に参加する為、全員が手を休めて集合。欠勤者の連絡、勉強会、行事などへの参加呼びかけ、院内各部署からの要請など短時間に必要事項をまとめて連絡する。(もう少し大きい声での批判は尤もながら、検査室は騒音がきびしく、声がなかなか通らない)。朝礼は、給料日の翌朝には、積立会費などの集金にも利用されている。また、一階、二階に分れ、ひょっとすると一日顔を合わせずにすませてしまうかもしれない技師同志が、ともかく、お互いの顔をチラッとでも認めあうことができるといった利点もある。朝礼終了後8時半には技師達は足早にそれぞれの持ち場に散っていく。(検査室紹介には、異質、型破りかと思うが、この時間帯が、鳥取日赤検査部の特長を最もよく表現していると思い、あえて記述)

さて、鳥取赤十字病院は、大正4年県から日赤赤十字社に移管され、当初内科、外科の

2科であったが、現在は14科、病床数500の総合病院である。JR鳥取駅正面から県庁前に至る鳥取市の中央通りに面し、周辺には、県庁、市役所、高等学校、県民文化会館、図書館などがある。病院の建物は平成2年大規模な改築が行われ、前近代的でさえあった手術室は西日本で上位にランクされる程よく整備され、新しい5棟の病室もゆったりとした空間をもち、入院患者にすこぶる好評である。検査室はこの改築に遡ること13年前、昭和54年に建てられており、当初斬新に思えた建物も、検査内容の変化に伴い、不満な点もでてきている。検査室員は、部長(外科)以下、臨床検査技師18(男5、女13)臨床病理技術士1(男)である。限られた技師が能率よく仕事をこなせるよう配置に工夫をこらしている。

	午前	午後
一般	2	2
血液	3 <small>このうち一名は午後病理へ</small>	3 <small>午後技師長が加わる</small>
生化	3	3
	<small>このうち一名は、午前と午後生理⇄生化とチェンジ</small>	
血清	1	3 <small>生理より2</small>
病理	1	3 <small>血液より1 生理より1</small>
細菌	1	2 <small>生理より1</small>
生理	7	3

午前中、生理は健診へ3、内科超音波1と出向いて仕事をしている。早番は15時50分



に業務終了、帰宅。時間外は、日曜、祭日は日直制。夜間は二次救急日以外は待機制をとっていたが、24時間いつでも迅速に検査できる体制にという意見が検査部門にたかまり、今年5月より、宿直制に移行した。依頼から報告迄の時間が短縮され、気兼ねなく依頼できるということから、件数が急増。特に、凝固検査、心電図で著しい。

外注、ランチと世間で喧しい。検査部は、検査技師は、如何にあるべきかと、皆が頭を悩まし、時に大声での議論に及ぶ。医療費削減の政策は、今後も更に推進されることであろうし、先が読めない。でも、いや、だからこそ、皆で考え、皆で努力して、検査技師、

検査部の存在意義を高めたいと念じ、一日一日を大切に、納得できる仕事をしたいと思っている。





# 北から南から

## 名古屋第二赤十字病院検査部

上田和裕

当院は名古屋市東部、緑の豊かな丘陵地に位置し、敷地面積24367㎡(7371坪)、建築面積54791㎡(16574坪)、病床835床、外来2000人/日、職員1400名、医師270名、看護部660名、検査部67名(病理医2、技師57、他8)3課14係、特殊診療部門として、

\*救命救急センター      \*腎移植センター  
 \*ICU(集中治療部)      \*骨髄移植センター  
 \*SCU(脳卒中治療部)      \*透析センター  
 \*CCU(循環器治療部)      \*熱傷センター  
 \*NICU(新生児治療部)  
 \*地域医療研修センター

多くの特殊部門を有し、高度医療ニーズに応ずることのできる、地域の基幹病院となっている。又、当院は救急医療を積極的に実施している病院なので緊急検査が毎日、昼夜を問わず24時間休むことなく依頼される。

例えば、訴えるすべを持たない新生児突然の呼吸停止(IRDS)、原因不明の意識障害、食道静脈瘤破裂による大量出血、はげし

い胸痛急性心筋梗塞(AMI)、激痛を伴う急性腹症、同時に緊急手術(腸閉塞)、交通事故での頭部手術、敗血症、白血病によるDIC、等々すべての救急患者に多くの緊急検査が必要となっている。

\*血ガス(PH、PO<sub>2</sub>、PCO<sub>2</sub>)      \*血算(WBC、RBC、Hb、Ht、Pl)      \*凝固(PT、APTT、FDP、ATⅢ)      \*腎機能(Na、K、Cl、BUN、CRN、Ca、P)      \*肝機能(ALT、AST、Alp、Bil、γ-GPT、TP、LDH、NH<sub>3</sub>、CRP)      \*膵機能(Gul、Amy、リパーゼ)      \*輸血(血型、抗体スクリーニング、クロスマッチ)

\*感染症(Hbs、HCV、梅毒、ATL、HIV)、ECG、心エコー、CPK、CKMB

以上の様な検査情報が、患者状態を把握するのに必須でそのニーズに応じた検査体制(当直3名、日直4名)で診療支援を1年365日休むことなく続けている。

又、検査の採血も外来(全て)、入院(一部)を1日400~500名位を8名の技師で実施している。





---

# 北から南から

---

## 伊豆赤十字病院

張 江 小 梢

修善寺町は、伊豆半島（静岡）の中央部に位置は、鮎の友釣りで知られる狩野川が町を南北に縦断する山あいの温泉地である。

町名の由来は、弘法大師開基と伝えられる古刹「修禅寺」。源氏ゆかりの史跡やゴルフ場など多くの娯楽施設。恵まれた自然と首都圏から近い地理的条件とも相まって四季を通じて訪れる観光客が絶えない。

当院の歴史は、昭和9年に日本赤十字社伊豆診療所として開設。昭和26年に伊豆赤十字病院と改称。現病院は狭隘化しているため、来年度からの改築が予定されている。

地域との密接なかかわり合いを重視、町の癌検診や訪問看護、職場検診などに力を注いでいる。

現在、内科、外科、産婦人科、小児科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、歯科の8科、一般病棟80床、結核病棟30床、1日平均外来患者数は230人、職員数120名で運営している。

検査室は、臨床検査技師4名で一般、血液、血清、生化学、細菌、生理（ECHO、眼底含）検査を行っている。

平常業務に追われ、研修時間もとれない状態であるが、互いに自己啓発に努め、自らの資質の向上を図って患者サービスに生かしたいと思っている。

